

日本フランス語フランス文学会

cahier

28

septembre 2021

I 2021年度春季大会の記録

ワークショップ

- 1 ボードレール（から）の越境
 吉村和明 岩切正一郎
 海老根龍介 山田兼士 1
- 2 『レペルトワール』を読む
 石橋正孝 新島進 三ツ堀広一郎
 三枝大修 福田桃子 5
- 3 生誕200年 フロベールを読み直す
 小倉孝誠 塩塚秀一郎
 中島太郎 松澤和宏 9
- 4 ジャック・デリダとジャン=リュック・ナンシー 友愛と共同性
 市川崇 柿並良佑
 伊藤潤一郎 松田智裕 13
- 5 l'écriture inclusive 再論
 立花史 矢頭典枝
 Olivier Ammour-Mayeur 片山幹生 17

II 書評

森本淳正、ジル・フィリップ（編著）『マルグリット・デュラス 〈声〉の幻前
 ——小説・映画・戯曲』、水声社、2020年

後藤はるか 22

森本淳生、鳥山定嗣（編著）『愛のディスクール——ヴァレリー「恋愛書簡」の
 詩学』、水声社、2020年

山田広昭 24

和田章男（著）『ブルースト 受容と創造』、大阪大学出版会、2020年

池田潤 26

I 2021 年度春季大会の記録

特別講演

« Baudelaire caricaturiste »
Antoine COMPAGNON (Professeur au Collège de France)

司会 中地 義和 (東京大学名誉教授)

in *LITTERA* n°7, mars 2022

ボードレール（から）の越境

コーディネーター：吉村和明（上智大学）

パネリスト：岩切正一郎（国際基督教大学）、海老根龍介（白百合女子大学）、山田兼士（大阪芸術大学）

ベンヤミンによれば、ボードレールが『悪の華』の読者として望んでいたのは「抒情詩を読むことに困難を感じる」人々であった。そういう読者に向けて彼は「偽善の読者よ、わが同類よ、わが兄弟よ」と呼びかけたというのだ（「ボードレールにおけるいくつかのモチーフについて」1940）。

そのような「読者」のひとりとして、詩人の恋人ジャンヌ・デュヴェールを想定することはあまりに突飛すぎるだろうか？ しかしジャンヌを彼の発想源——その「ミューズ」としてのみ見るのではなく、植民地生まれで当時のフランス社会で生きる場所を見つけるために並大抵でない苦労を重ねるひとりの孤独な女性として見るとき、それはボードレールの詩をどう読むかという問いに深くかかわってくる（くぼたのぞみ『鏡のなかのボードレール』2016）。ジャンヌは詩人にとってもっとも近く、同時にかぎりなく遠いひとりの「他者」にほかならない。そしてまさにボードレールはそのような存在として詩の「読者」を想定していたのではないか。

このような詩（人）と読者との関係性を、「詩の贈与」という観点から問題にしたのがミシェル・ドゥギーである。彼は、ボードレールの時代とわたしたちの時代は「底なしの分断」によって隔てられているという（『ピエタ ボードレール』2005）。にもかかわらず「ボードレールの作品は（...）わたしたちに語りかけてくる。言語のなかで、フランス語のなかで、はるか彼方からすぐそばから、わたしたちのもとへやって来る」。ドゥギーはそのような事態を体現する詩作品として、『悪の華』（「第二版」）で39番目の無題のソネを挙げている。「ジャンヌ詩篇」と呼ばれる一群の詩篇を締めくくるこの詩には「詩の遺言条項」が書き込まれていて、詩は「遺贈品」としてわたしたちのもとに届けられる、そうドゥギーはいうのだ。こうして彼のいう「移送」が行われることになるが、ボードレールの作品をそんなふうを受けとめることは、わたしたちがまた別のところに、別の「他者」に向かってそれを「移送」という責務を自ら負うということでもあるだろう。

くぼたのぞみは「鏡としてのボードレール、鏡となりうるボードレール、一枚

ではなくて複数の鏡面をもちうる鏡として、ボードレールの詩はどのような役割を割り振られてきたのだろうか」と問う。生誕 200 年を迎えたいま、ボードレールはどのように読まれうるのだろうか。(吉村和明)

フランスの中等教育の文学史教科書では、ボードレールの扱いは 1920 年頃から評価が高まる。1920 年代と言えば、T.S.エリオットが『荒地』(1922)のなかで『悪の華』の詩句を会話のなかに滑り込ませたり、「*Baudelaire est au comble de la gloire.*」で始まるヴァレリーの講演 *Situation de Baudelaire* (1924) が出版されたりする時期だ。ほぼ同時期の 1927 年、小林秀雄は日本でのボードレールの受容について「現代日本が不埒な手つきで、この漆黒な石の表面に描いた線条は凡そ無慙なる赤銅色を呈している」と酷評している。

前衛短歌を牽引した塚本邦雄(1920-2005)は、ボードレールを「悪」の意識もしくは美学のもとに、独自の手法で創作に採り入れた歌人であった。自分は「悪の鎖」の作家を「触覚と嗅覚」で選び取った、と自負する彼は、戦時下にあって魂の自由をそこに見出し、「全体主義の暴力を精一杯嗤っていた」(「悪について」、『序破急急』(1972、初出は『短歌研究』1956.1))。人の心と自然の風物とが安易に一体化してしまう和歌的な抒情を峻拒し、人間の本質を虚構のなかで顕すことを目指した彼の美学の一端は、第一歌集『水葬物語』(1951)に所収の一首「ここを過ぎれば人間の街、野あざみのうのはしき棘ひとみにしるす」に見ることができる。

彼のボードレールの受容はかなり風変わりである。『悪の華』の詩は「フランス人にとってさえ恐らく一般には難解な、日本人である私たちはテキストを暗誦し、自ら苦しんで翻訳し、しかるのち鈴木信太郎や村上菊一郎の名訳で修正し、辛うじてその詩のアウトラインをつかむ程度のもものではあるが〈...〉」というのだ(『定型幻視論』(1972))。「旅への誘い」を新古今の藤原良経の和歌と付け合わせて鑑賞し、ヒヤシンス石を花の色と取り違えて独自の美学を展開したりしている。形式的にも、『悪の華』のソネットの脚韻のフォルムを 14 首の短歌のまとまりで構成する実践を行っている。

彼にとってボードレールは「絢爛たる荒寥さを秘めた」詩人であり、「芸術は詩は美をもってする人間の魂の救済の他には、何の効用もない」ということを証してくれる詩人なのである。そこには、思い込みの激しい一徹な愛があった。彼は「魂の世界の不当に軽視されている私たちの時代」(『定型幻視論』)と言うのだが、100 年前のボードレールが日本の現代短歌へ越境するときに持っていた力とは、魂の棲むことができる真の場所を設定し得る力であったと言えるだろう。(岩切正一郎)

近年の日本においては、アカデミズムの枠内でのボードレール研究が変わら

ず続けられる一方、その外部での詩人の存在感が薄れている印象は否めない。1960年代後半から1970年代前半にかけて、ボードレール死後100年を記念する、雑誌の充実した特集号が日本でも何冊か刊行されている。『無限』（1966）、『本の手帖』（1969）、『ユリイカ』（1973）などの特集号に加え、出口裕弘の新書『ボードレール』（1969）や阿部良雄の著作など、同時期に刊行された何冊かの単行本をも対象に検証していくと、現在との間で、ボードレールを語る文脈にいかなる変化が生じたのかが見えてくる。

日本のボードレール受容は、永井荷風や梶井基次郎などのほか、たとえば小林秀雄に代表される批評家や、萩原朔太郎、山村暮鳥、大手拓次といった詩人において、いわば近代性の枠内で行われてきた面がある。しかし1960年代後半には、近代性を体現するボードレールの文学が、たとえばランボーやロートレアモン、マラルメと比べたとき、もはや見るべき「新しさ」を持ち得ないのではないかという意識が先鋭化し、論者間で「古さ」と「新しさ」の問題をめぐって、それなりにかみ合った応酬がなされていたように見える。たとえば金子光晴や齋藤磯雄などによる、「古さ」にこそこの詩人の魅力はあるのだという世代的な実感を伴った主張に対して、1950年代に先駆的なエッセイを発表した橋本一明や高島正明はそうした19世紀の魅力との決別を宣言する立場をとり、渋沢孝輔や出口裕弘は「古さ」を認めつつ位相をずらし、そこに安定性を壊す創造的エネルギーを、それぞれのやり方で認めようとした。ボードレールの「古さ」を高く評価する阿部良雄は、同時に19世紀フランスの文脈における詩人の「新しさ」を学問的に精緻に確定することを目指したが、それは逆説的にも、「いま」という状況下で、「古さ」と「新しさ」という文脈からボードレールを解放し、自由に享受する可能性を切り開くことにもなり、その両義性はとりわけ興味深い。

「古さ」と「新しさ」をめぐる葛藤という共通の文脈が消失したなかで、いかにボードレールを読み続けられるのか、たとえば、古井由吉『詩への小路』（2005）所収の、詩篇「7人の老人」にモチーフを得たエッセイともフィクションともとれる一篇は、その困難と可能性の一例として考えることができるのではないだろうか。（海老根龍介）

ボードレールは生涯にわたってピエール・デュボン論を2度書いている。一つは1851年でもう一つは1861年だ。どちらもボードレールの作品史における重要な転換点で、前者は『悪の華』前史というべき『冥府』詩篇11篇発表の年であり、後者は『悪の華』第2版刊行の年であるとともに散文詩集『パリの憂愁』の本格的な出発の前年でもある。つまり、『悪の華』の創造が本格化しようとする年から、散文詩への傾斜を明らかにする年まで、ということは、『悪の華』という韻文詩創造の全期間を凝縮した10年だった（次に来るのは散文詩の時代だ）。

民衆の生活を描いたデュボンのリアリズムは、一見、ボードレールのダンディ

スムとは相反するようだが、そのレアリスムをボードレール晩年の散文詩までの経緯を重ねてみると、デュボン／ボードレールの社会性、政治性、諷刺性、批評性が明らかになる。例えば、デュボンの作品「労働者の歌」と、ボードレール作品「タバの薄明」の韻文版と散文版を重ねて読めば、その経緯は明らかだ。ボードレールが晩年に到達したソネット「ベルギー人と月」や散文詩「善良な犬たち」のイメージに描かれたのは、まさに「犬としての詩人の生」にほかならなかった。その犬の像をほかでもない自らの像として歌いきったのがレオ・フェレだ。

『悪の華』全体の4分の1ほどの詩に曲をつけて自ら歌ったLPを3枚出し、ランボーやヴェルレーヌやアポリネールやアラゴンの詩にも作曲して歌ったフェレは、20世紀における「文学的シャンソン」の代表的シンガー・ソングライターだった。フェレは、ボードレールやデュボンの二月革命から約120年後にあたるパリの五月革命(1968)に際しては、作品「犬」を自ら作詞作曲して歌った。フェレにとって(また晩年のボードレールにとっても)、自らの「用」をもつ犬たち、無為の倦怠にふけるのではなく勤勉に務めを果たす生活の犬、リアルで等身大の労働者たる犬こそが、詩人の自画像にほかならなかった。

散文詩「犬」は、「ポエジー」や「詩人よ、証明書を」などと並ぶ詩人論詩と呼んでもいいだろう。ここで詩人は「善意の犬 des chiens de “bonne volonté”」(フェレ)であり「善良な犬 les bons chiens」(ボードレール)である。三人称でも二人称でもなく一人称で「俺は犬だ」と言い切るレオ・フェレ。ここに20世紀のボードレールがいる。ロックでパンクな現代詩人としてのボードレールが、更に次の時代へと船出しようとしている。(山田兼士)

ワークショップ2

『レペルトワール』を読む

コーディネーター：石橋正孝(立教大学)

パネリスト：新島進(慶應義塾大学)、三ツ堀広一郎(東京工業大学)、三枝大修(成城大学)、福田桃子(慶應義塾大学)

20世紀フランス文学を代表する作家・詩人・批評家であるミシェル・ビュートル(1926-2016)は、1950年代の文壇を席卷した「ヌーヴォー・ロマン」の旗手として文学史にその名を刻まれてはいるものの、各巻が900頁を越える全12

巻の個人全集のうち、「ロマン」と題された巻は一卷しかない事実に明らかなように、小説家という呼称には到底収まりきらない過剰な存在であった。その文業の全貌を探查する企ては他日に譲り、本ワークショップでは、批評の分野におけるビュトールの代表作である「レペルトワール」全五巻の完訳の刊行が幻戯書房より開始されたのを期に、この評論集の魅力と射程を再発見する一助とすべく、監訳者である石橋を司会進行役として、翻訳に参加した四名がそれぞれの担当評論を中心に発表を行った。

最初に、第一巻収録のルーセル論、SF論、レリス論を翻訳した新島進が、「Les deux Michels」と題して、若き日のビュトールとミシェル・カルージュ(1910-1988)の関係を論じた。インタビュー集『履歴書』においてビュトールは、『レペルトワール I』に所収された論考のうち、反復という主題を底流に持つ数篇はカルージュとの話し合いの過程で形成されたものだと語っている。主著『独身者機械』(1954年)で知られ、みずからのカトリック信仰とシュルレアリスムの理念を独自の解釈で融合しようと試みたカルージュとビュトールとのつながりは一見、意外に思える。だが、ビュトールの証言にあるとおり、ある集会で出会って以来、カルージュは年少の青年を「庇護し」、シュルレアリストらと引き合わせ、『仔猿のような芸術家の肖像』で描かれるドイツ滞在のきっかけをつくるなど、学生時代のビュトールのまさに導き手であった。また、今回の発表ではその前史にも注目した。カルージュは戦時中、やはりカトリック知識人のマルセル・モレが主催していた集会に参加しており、同サロンにはミシェル・レリスやレーモン・クノーも姿を見せていた。これらの人物はジュール・ヴェルヌとレーモン・ルーセルの読者であり、戦後こそって両者の復権に力を注ぐことになる。ビュトールが同じ歳のミシェル・フーコーよりも遥かに早い段階でルーセルを発見し、現代に通じるヴェルヌ再評価の礎を築くことができたのは、カルージュが経ていたこうした人間交際があったからなのだ。

続いて新島は師弟の実際の論考を参照した。ビュトールのルーセル論については、雑誌初出のヴァージョンと『レペルトワール I』版を比べると、とりわけ前者にカルージュの影を見出すことができる。また1949年、同じ冊子に寄稿された両者のヴェルヌ論——ビュトールのそれはのちに『レペルトワール I』に収録——には少なからぬ類似点があり、とりわけビュトールが用いた「至高点」、「黄金時代」といった用語がカルージュ経由であることが推測されるが、しかし影響は語の借用に留まるとも言える。世界大戦が喚起した終末論を背景として共有しつつも、カルージュがあくまで神秘主義的なカトリック思想に拘泥するのに対し、ビュトールにおいては実存における文学的営為が問題になっている。それが反復、そして小説への「形式」の導入として解決されるのなら、この段において若き日のビュトールは、師から吸収したヴェルヌ、ルーセルに関する知見から出発するも、そこからむしろ、小説におけるシステムの問題を再開拓したクノー、

ジョルジュ・ペレックらと並走していたことがここでも確認できるだろう。

二番目の発表者である三枝大修は、カルージュの影響下で執筆された一連の論考のうち、とりわけ重要でありながらこれまで比較的看過されてきたキルケゴール論を取り上げた。『レペルトワールⅠ』には「反復」「一つの可能性」という二篇のキルケゴール論が収められている。前者は「コンスタンティン・コンスタンティウス」という偽名で発表された長篇『反復』についての、後者は「製本屋ヒラリウス」の名義で発表された『人生行路の諸段階』所収の短い物語「一つの可能性」についての、いずれも堅実な作品論である。本発表では翻訳者の立場から、これら二本の論考についての簡単な紹介を行った。

『反復』と「一つの可能性」に共通するのは、両作品がともにキルケゴールにとっての自伝的な要素を含んでいるという点である。作者が現実において経験した出来事のいくつかを、二人の主人公もまた作中で経験する。『反復』の「青年」であれ、「一つの可能性」の「会計係」であれ、二作品の主人公はまぎれもなくキルケゴールの分身であり、代弁者なのである。

だが、この作家は無数の偽名の使用によっても知られる極度の韜晦癖の持主であり、いくら自伝的なものであるとはいえ、くだんの二作品を精読しさえすれば、その思想や伝記的事実に光を当てることができるというわけではない。事実、キルケゴールの難解さや晦渋さについては『レペルトワール』の著者も再三再四、強調しているところであり、その筆致からはこのデンマークの作家に対する畏怖の念、畏敬の念が伝わってくる。すなわち、キルケゴールは偽名という「防衛装置」を身につけたうえで「迷宮」的なテキストを構築し、読者をそこに招き入れては煙に巻こうとする一種の「スフィンクス」なのである。

もっとも、ビュトールによれば、キルケゴールは全知全能の作者の立場で自作を完全に統御していたというわけではない。読者が作品の中にキルケゴールの影を探し求める一方で、キルケゴール自身もまたエクリチュールを通じてみずからを十全に理解しようと努めていたのである。そして、この作家にとっての自己の再定位の表徴は、『哲学的断片へのあとがき』の末尾において果たされる、偽名から本名への移行の内に見てとることができるのではないかと——そんな可能性を、ビュトールは示唆している。

続いて、福田桃子は、自身が翻訳を担当したおとぎ話論「妖精たちの天秤」を手がかりに、ビュトールと児童文学との関係を考察した。まず、ビュトールの作品歴の中から児童文学およびこのジャンルと関わりの深い作品を整理した。すなわち、批評家としては「妖精たちの天秤」「少年時代の読書」等があり、小説を含む主要作品には、旅や冒険、恋愛、幻想、夢、ゲーム性といった児童文学と通底する要素が認められる。しかし、とりわけ注目されるのは、芸術家との共作の形で複数の絵本が制作されていることである。最初期の評論「妖精たちの天秤」の結語は、「妖精たちの物語は、みずからがその平衡錘の役割を果たす社会と密

接につながっていて、本物の「新しい妖精譚」を今日執筆することはもはや不可能だろうと私は思う。古い物語は残っていても、成長する子どもの困難はもはや同じではないため、われわれは妖精譚を別の物語で補完せねばならないが、それらの物語における妖精たちの顔は見る影もなくなってしまっているの、新しい名前を与えてやらねばならない」となっているが、まさにこの言葉の実践として、それらの絵本は書かれている。親しい友人でもあった画家マズロフスキーの絵にテキストを寄せ、1972年に刊行された『小さな鏡』では、退屈な公教育と並行し、それを補完する教育として、鏡の向こうにある世界、動物が教師を務める世界が描かれる。最後には先生まで鏡の国に行ってしまう、ヴェカンスになった時には主人公はすっかり日焼けをしているのみならず、学期が終わったことを残念に思う。ビュートルが考える児童文学のあり方そのものが物語になっているという意味で、まぎれもなくメタフィクションである。ちなみに1965年に刊行された『親愛なるマルク＝ジャン』では、マズロフスキーの息子が描いた絵を並べ直し、ストーリーを見出すという方法が採られている。2012年の『三つの城』は、赤ずきんをベースとしつつ、主人公たちが携帯電話で親からアドヴァイスを受けながら冒険する。「妖精たちの天秤」での古典的なおとぎ話の分析や先に引用した結語と照らし合わせれば、逆転されるべき経済的格差や性別の問題が稀薄であり、子どもたちが直面すべき問題が変わっている事実が示唆されているようだ。とはいえ、おとぎ話にあった野蛮なまでの革命的エネルギーがもはや現代の児童文学には許されていない、ということにならないだろうか。この疑問に明白な「ノン」を突きつける異形の傑作こそ、2006年に刊行された『灰色狼、青色狼』にはほかならない。一度見たら忘れたいカヴィクによる挿絵、そして彼が提案した物語にビュートルが言葉を与えて成ったこの作品では、逆転されるべき格差は、人間と動物のあいだのそれに置き換えられ、かつて悪役であった狼は、人間に理解されることを望みながら徹底的に迫害される弱者として登場する。そこで展開される物語を追えば、異質なものの融合、現実との高次の和解による矛盾の解消等、カヴィクのテーマがビュートルのそれと共鳴し、迫力ある作品を生み出していることがわかるだろう。

最後に、三ツ堀広一郎が、みずから翻訳を担当した論考から出発して、ビュートル批評の全体、とりわけ個別論の特徴を分析した。『レペルトワール』には、小説や書物に関する原理論的な考察に加えて、特定の作家や作品に焦点をあてた批評的エッセーも多く収められている。そこでラシーヌ論「ラシーヌと神々」（『レペルトワールⅠ』所収）、およびシャトーブリアン論「シャトーブリアンと旧アメリカ」（『レペルトワールⅡ』所収）の二編を題材に、ビュートルの作家論の特徴を捕捉することを試みた。そのために着目したのが、おびただしい分量の引用である。これらの引用は、論証にあたっての論拠の提示という、評論での通常の役割を大きくはみ出しているように見える。この点に関係してくるのが、ビ

ュートルの文芸批評を特徴づける物語性である。シャトーブリアン論でも、対象を分析したうえで何がしかの概念で括り直すというしぐさはほとんど見られず、かわりにシャトーブリアンを主要作中人物とする物語が、概念ならざる種々の比喩形象とともに繰り広げられる。多くの長い引用箇所は、エッセー本文で展開される物語に人物や比喩を提供し、またその効果を賦活する点で、ュートルの物語叙述に参加していると言えることができる。つまりュートルは、シャトーブリアン「について」書く (*écrire sur*) という以上に、シャトーブリアンのテキスト「とともに」、あるいはシャトーブリアンのテキスト「を使って」書く (*écrire avec*) のだ。この点でュートルの作家論は、他者のテキストからの引用を多くまじえ、ときにコラージュのように紙面に配置してみせる 1960 年代以降の諸作品とははっきり区別するのが難しく思えてくる。そもそも引用とは、読むことと書くことを、それこそ物理的に一致させるしぐさにほかならない。ュートルの批評的エッセーにおける引用が示しているのは、他者のテキストを読むことが自分のテキストを書くことと地続きであるような、ュートル的テキストの生成原理そのものなのである。

以上のように、『レペルトワール I』を出発点としつつ、各論者の関心に沿った発表を通じて、ュートル作品そのものの多面性、そしてその今日的魅力が自ずと浮かび上がったワークショップであった。司会者の不手際もあって発表だけでほぼ時間を費やしてしまい、質疑応答を十分になしえなかったことは残念であるが、二巻以降の翻訳刊行の過程でそうした機会が得られることを願ってやまない。

ワークショップ3

生誕 200 年 フロベールを読み直す

コーディネーター：小倉孝誠（慶應義塾大学）

パネリスト：塩塚秀一郎（東京大学）、中島太郎（中京大学）、松澤和宏（名古屋大学）

今年生誕 200 年を迎えるフロベールは、同時代及び後世の作家（そこにはジョイスやカフカなどの外国人作家も含まれる）に絶大な影響を及ぼし、現存作家の

何人かにとっても重要なアイコンであり続けている。フランスでは、最新の研究成果を反映した新たな全集がプレイヤッド叢書で完結し、2021年に入ってから雑誌が特集号を組み、論集が刊行されている。日本では『ボヴァリー夫人』、『ブヴァールとペキュシェ』などの主要作品がこの数年間で久しぶりに新訳された。

こうした経緯を踏まえ、現代のわれわれはフロベールをどのように読めるのかが本ワークショップの趣旨だった。『ボヴァリー夫人』の中にどのような新たな意味を読み込めるのか。フロベールは19世紀の文学風土と知的世界の中でいかなる位置を占めていたのか。そして20世紀後半の文学にどのようなインパクトをもたらしたのか。それを問いかけた三つの発表に続いて、聴衆からの質問をうけて実り多い議論が展開した（小倉孝誠）。

『ボヴァリー夫人』結末におけるシャルルの変貌について

松澤和宏

エマの死後、彼女の残した膨大な借金返済のために、シャルルは田舎で働く保険医として不可欠な馬を売らざるを得なくなる。市でエマのかつての愛人ロドルフと出会い、二人は居酒屋に入って、向かい合って座ることになる。シャルルはロドルフをじっと苦しげに見つめた後に「もうあなたを恨みはしません!」、そして「それは運命のせいです!」という言葉の口にする。「運命を操ったロドルフ」は、コキュのシャルルの滑稽な事実誤認の言葉として冷笑的に受け止める。しかしシャルルの言葉はエマの死因に関する事実確認をめぐる発話ではなく、赦しという遂行的な言語行為である。シャルルは「お人好し」や「卑屈」だから赦したのではなく、内なる怨恨を敢えて放下して、ロドルフを赦したのである。無条件の赦しの例としては、『レ・ミゼラブル』で盗みを働いたジャン・ヴァルジャンに対するミリエル司教の赦しなどが思い浮かぶが、シャルルの言葉は、これまで研究者によっても無条件の赦しの行為としては受け止められてこなかったのである。草稿には「ロドルフには、傲慢さ *orgueil* を欠いた情念を理解できなかった。この情念は、広大さと *impersonnalité* のあまり、純粹觀念の域に達していた」という説明的な一節が書かれてあったが、「作者の介入」を自らに禁じる没個性の美学の観点から削除された。つまり *impersonnalité* は、没個性の美学であると同時にエゴイスティックな傲慢からの離脱を意味している。シャルルがエマに抱いていたエロスは、無所有の状況の中で、傲慢から離脱することで「限りない」愛へ転調を遂げ、ロドルフへの無条件の赦しをもたらしめていることが読み取れる。ロドルフに、倫理の名において不可能な贖いを求め続けることは、内なる怨恨や所有欲に固執することであり、そこには自己絶対化に繋がる傲慢が潜んでいるからである。

エマの死の直後では、シャルルは動物磁気による奇跡を一瞬思い出してエマの名前を呼んでみたり、過去の思い出に耽ったり、来世での再会の希望を抱いたりしていた。ところが時が経つにつれて、過去の折々の面影は失われていくものの、亡きエマは近くに現前し続けるようになる。そしてロドルフを無条件に赦した翌日に庭先で自然の中に消えるように亡くなるのだが、シャルルを包む「そこはかとなく漂う愛の香気」 *vagues effluves amoureux* は、ジャスミンの芳香と感覚的に混じり合う香気として空間的開放性を示すと同時に、エマとのスピリチュアルな絆が死を超えて吹き込む息吹として時間的超越性を宿している。光と香りの渦輪の中の〈今・ここ〉への亡きエマの充溢した現前に、実証科学や宗教的教義などの〈知〉では捉えきれない、「生を超えた何か崇高なもの」(フロベール)の神秘的な影が揺曳しているのではないだろうか。

宗教と科学：『サランボー』のオリエントの神をめぐる

中島太郎

フロベール作品を横断する宗教と科学の問題は、古代カルタゴにおける傭兵の反乱を描いた『サランボー』(1862)にも刻印されている。世紀前半の宗教知に依拠する初稿『聖アントワヌの誘惑』に対して、この作品は後にフランスの宗教学の基礎となる、より実証的な宗教知に支えられている。近年の研究で明らかにされてきたように、雑誌『ドイツ評論』及びルナンやモーリーら宗教学者との交流を通じて、フロベールはドイツ由来の最新の宗教研究に接していた。実証的な聖書研究は必然的にカトリック教会との軋轢を生む。1860年頃にフロベールが反宗教的な思想へと傾くきっかけとなるのが、パトリス・ラロックのキリスト教批判検討であった。これは徹底して合理主義的な教義批判である点で、キリスト教の起源史をめざしたルナンと異なる。ラロックによる批判は、異教の神モロックを旧約の神ヤハウェと同一視するドイツの聖書批判(ダウマーら)と結びつく。アニエス・ブーヴィエが指摘する通り、神々の怒りを鎮めるべく行われる子供の人身御供(13章「モロック」)の背後には、こうした反教権的なイデオロギーが横たわっている。フロベールが聖書の神をオリエントの神に譬えて、その偏狭で人間的な観念を批判するとき、そこにはラロックの影響を見てとれる(パウロの予定説、イザヤ書の災いをもたらす神)。正義の観念に照らして教義を不敬虔なものともみならず書簡についても同様である。

魅惑的なイエスを描いて福音書の道徳を称賛したルナンを、ラロックは理神論者の立場から不徹底と批判した。ここから、フロベールとミシュレを接続することができる。フロベールは社会主義を批判する際に、ミシュレから借用した正義と恩寵という対比を用いていた。この図式は、『イエス伝』に対する反駁書で

ある『人類の聖書』でも見られ、ルナンを批判する際にラロックが用いられている。ただし、注意すべきは、このミシュレによる人類の精神史もルナンと同様、セム族 vs インド・ヨーロッパ族の図式に依拠している点である。ここに恩寵と正義の対比も重なっているのである。一方、『サランボー』はセム系カルタゴを扱いながらも、こうした人種の構図を無化するように働いている（G. セジャンジュール）。参照されたミシュレはむしろ『フランス史』第13巻であり、残酷な君主の形象という点で、子供を屠る太陽神モロックと、新教徒の子供の誘拐を命じたルイ14世とが結びつく。

教権主義の色濃い第二帝政期を生きたフロベールは、同時代の宗教批判や自由思想から多くを学んだが、キリスト教に代わる理性的宗教やフランス革命による権利の勝利を信じていたわけではない。事実、小説でカルタゴの不正義に対して反乱軍の正義が描かれることはなく、合理的精神を体現するハミルカルは私利私欲に囚われている。とはいえ、物語の様々なレベルで起こる宗教的なものの揺らぎは、明らかに19世紀の宗教知の問題と響き合っている。小説に描かれたアイロニーは、歴史を参照することでその重層的な意味が浮かび上がってくると言える。

物語の彼方と手前：クノーとペレックにおけるフロベールの遺産

塩塚秀一郎

現代文学へのフロベールの影響はさまざまな切り口で考察することが可能だろうが、本報告ではフォルマリストの系譜に属するウリポの作家、特にレーモン・クノーとジョルジュ・ペレックへの影響について、ヌーヴォー・ロマンとの対比を視野に入れつつ論じた。

ラウル・ドゥルマジュールによれば、ペレックの代表作『人生 使用方法』（1978）は『ブヴァールとペキュシェ』をモデルのひとつとしているという。両者とも他者の言説の取り込みを主要な構成原理としているからというのがその理由なのだが、この見立ての根拠としては「語りからの離脱傾向」を指摘することもできるだろう。『ブヴァール』においては、物語の要請よりも百科事典の要請が優越する傾向があり、同様に、集合住宅の室内を書き尽くす企てである『人生 使用方法』においても、物のおびただししい列挙により語りが停滞しがちだからである。

『ブヴァール』がもつリスト的な性格は百科全書的小説という構え自体に起因するものである。他者の言説や読書ノートなど、辞書的な項目を小説空間においていかに提示するか。これこそフロベールが取り組んだ課題であったはずだが、クノーが『リモンの子供たち』（1938）において直面したのも同様の問題なのである。クノーはこの小説の中に未刊のまま放置されていた自著『不正確科学百科

事典』を取り込むことを目論んだ。二人組の作中人物が小説内で『不正確科学百科事典』を編纂する様子が描かれ、少しずつこの百科事典が姿をあらわす仕掛けとなっているのである。『ブヴァールとペキュシェ』についても、第二巻の方から振り返って書物の前方を照らし出すなら、第一巻の小説部分は、来たるべき百科事典が二人の独学者によって作られてゆく物語としても読みうるだろう。『リモンの子供たち』と『ブヴァール』の物語はいずれも、未完成で開かれた百科事典を浮かび上がらせているのである。

フロベールとの類縁性は、『リモンの子供たち』においては来たるべき百科事典として、『人生 使用法』においては語りや描写に整序される前の列挙として、いずれも〈未完成〉かつ〈開かれたもの〉をもたらしている。『リモンの子供たち』における百科事典は、登場人物による準備・調査・編集を描く物語の果てに浮かび上がるものであり、言わば「物語の向こう側」に位置するとも言えるだろう。それに対し、『人生 使用法』におびただしく出現する列挙は「物語の手前」にある素材である。

ヌーヴォー・ロマンが、フロベールの遺産を物語からの離脱や描写の偏重へと注ぎ込んだのに対し、クノーとペレックは、物語の「向こう側」と「手前」でフロベールの遺産を受け取りつつ、物語自体の復興をも試みたのである。そこで問題とすべきなのは、クノーとペレックにおいて、物語の再活性化が何を目的とし何に寄与したかということであろうが、この問題に答えるにはまだ機が熟していないようだ。

ワークショップ4

ジャック・デリダとジャン＝リュック・ナンシー 友愛と共同性

コーディネーター・パネリスト：市川崇（慶應義塾大学）

パネリスト：柿並良佑（山形大学）、伊藤潤一郎（日本学術振興会特別研究員）、松田智裕（国立情報学研究所）

ジャック・デリダとジャン＝リュック・ナンシーのあいだには深い友愛と緊張感に満ちた対話が続いていたことは知られているが、2019年にはナンシーによる主要なデリダ論を再録した『デリダ 補遺（代補）』が刊行された。ワークショップ「ジャック・デリダとジャン＝リュック・ナンシー 友愛と共同性」はこ

のテキストを出発点としながら、両哲学者の思想の近接性と差異を改めて検討することを目的に企画された。市川、柿並、松田、伊藤は異なったテーマについて、様々な時代に行なわれた両哲学者の議論を取り上げ、「友愛と共同性」をめぐる両者の思考の差異に光をあてることを試みた。

コーディネーター兼発表者の市川は、『デリダ 補遺(代補)』に収録されたナンシーのテキスト「ユダヤ・キリスト教的なもの」に注目し、デリダの『信と知』における考察に応答しつつ書かれたこのテキストにおいて「信」の概念が持つ射程を検討した。また両哲学者による異なった「信」の解釈が、民主主義をどのように思考することを可能にしているのかが論じられた。デリダの『マルクスの亡霊たち』においては、教条主義的マルクス主義に還元不可能なマルクス主義精神が、あらゆるプログラムや計算に抗して、現在のうちに現前することのない未来への開け、「メシアニズムなきメシア的なもの」への呼びかけとして提示されていた。デリダはこのような絶対的未来に開かれた経験の肯定が、「新たなるインターナショナル」の構想を可能にすると述べていた。そしてこのメシア的なものの肯定は、解放を目指す約束の経験でもあった。

デリダは1994年の講演『信と知』において宗教的なものを再考することを提案し、カントの『たんなる理性の限界内における宗教』を参照しつつ、教条的な信仰とは区別され、知に従属されることのない反省的な信の可能性を考えていた。さらにこのテキストでは、『マルクスの亡霊たち』で提示された「メシア的なもの」にも言及がなされ、プログラムや計算に導かれることのない「メシア的なもの」への開けは、「信」の領域に属していると述べられていた。他方、「メシア的なもの」とは、あらゆる言表を可能にする言語の超越論的条件として提示される。私が何を語ろうと、私が口を開く瞬間に「私を信じて下さい」というメッセージが発せられるのであり、「信」とはこのような証言可能性を構成している。ところで、こうした他者の信頼への呼びかけとしての「信」は「誓約(foi jurée)」でもあるのだが、それは発話者が虚偽の証言を行なう際にとりわけ、その言表を貫いて作用するはずだとデリダは述べるのである。先に見た「新たなるインターナショナル」を可能にする約束の経験は「信」の経験でもあったが、民主主義の約束は共産主義の約束と同じく、絶対的非限定状態にある「メシア的なもの」の希望をその核心部に保ち続けるとデリダは述べていた。そこから、証言可能性としての「信」が偽証の可能性を排除できない以上、この「信」はどのようにして「来るべき民主主義」という共同性なき連帯の絆を紡ぎ得るのだろうかとし川は問いかけた。

次に、ナンシーの「ユダヤ・キリスト教的なもの」が検討され、ナンシーは「信」の意味を無限に差延されるバルウシアの不在に入るように、共約不可能な死の中に入ることと解釈していると指摘された。ナンシーは、知に従属されることの

ない行動としての「信」を考えながら、その「信」が主体の中に生じさせる裂開に焦点をあて、共約不可能なものへ向けての主体による自己自身の実践的超過の可能性を思考しているとされた。続けて、デリダの「信」が「ウイ（諾）」という他者への確認・応答を含み、この「ウイ」はあらゆる行為遂行的発話と同様に、言語自体を成立させている「反復可能性」なしには機能し得ない点が確認された。また、反復可能性が技術的なもの、機械的なものを前提としていることから、デリダの語る「信」が技術的なものなしには生じ得ないことが指摘された。これに対し、ナンシーは『アドラシオン』において、我々は「信」によって意味の領域に差し向けられるとし、この意味への欲動は技術を超え、技術と資本からなる社会・経済体制をズラすことを可能にするとして述べていた。

最後に、2003年のシンポジウム『来るべき民主主義』で読み上げられたデリダの講演「支配と計測」における、ナンシーの「兄弟愛／博愛」、「主権性」概念の批判が取り上げられた。そして、同じシンポジウムでのナンシーの発表「レ・ファ・ミ・レ・ド・シ・ド・レ・シ・ソ・ソ」では、上記2点についての反論が試みられると同時に、「信」の新たな側面が検討されていることが確認された。この発表においてナンシーは、「自らについて語りつつある我々」としてデモスでもエトノスでもない「人民」の存在を考え、私と他者をつなぐ「共（l'avec）」の次元は「接触」、「契約」、「信」という3つのエレメントによって構成されると述べていた。ナンシーの考えるこの「信」とは、未だ現前しない「来るべき他者」への呼びかけではなく、今、此処において「自らを語りつつある人民」、すなわち私という特異性を含む「我々」への信頼であることが明らかにされた。

松田の発表では、哲学教育を軸にデリダとナンシーの関係が論じられた。周知のとおり、「共同性なき共同体」の思想を練り上げるナンシーに対して、デリダはいたるところで疑念を呈している。デリダによれば、ナンシーが依拠する「兄弟愛」という理念は男性中心的な兄弟共同体を想起させるものであり、「共同体」もまた、なんらかの同一性のなかに他者を取り込む「私たち」の暴力性を示している。こうしてデリダは、「兄弟愛」や「共同体」をめぐるナンシーの試みに批判の眼を向けるわけだが、デリダは「共同体」の問題をまったく思考しようとしなかったわけではない。1970年代～1980年代のデリダは、哲学をめぐるフランスの教育政治の歴史を検討しており、その過程で新たな教育制度に根ざした「思考の共同体」を模索していたからである。この点で、デリダの哲学教育論において教育政治と共同体の問題は大きな比重を持つことになるが、これはナンシーにとっても無関係ではない。実際、彼は1974年に発足した「哲学教育研究グループ（GREPH）」に参加しており、1977年にはベルナデット・グロマーとともに「第五学年の哲学」と題する共著論文を発表している。デリダにとって「思考の共同体」がGREPHの活動をとおして浮上したものであることを考慮するなら、

1970年代～1980年代の彼が問うた哲学の教育政治と共同体の問題は、ナンシーにも共有されていたテーマであるだろう。では、哲学教育の問題をとおしてデリダとナンシーがともに思考した教育政治と共同体の問題とはいかなるものだったのか。松田の発表ではまず「第五学年の哲学」が検討され、そこでナンシーが理論的言語と情動的言語の分断として教育政治を問題にしていたこと、その分断に先立つ哲学の経験を思考していたことが明らかにされた。そのうえで、1990年の『哲学の権利』所収のデリダの論考「特権」を取り上げ、「自然と制度」という観点から、デリダがナンシーの共同体論に潜む自然主義を批判的に問いただしていたことが指摘された。

伊藤の「デリダの耳、ナンシーの耳——両者におけるトーンの分有」では、1980年代のデリダの周辺における「声」をめぐる豊かな対話を踏まえ、「声」と「トーン」という観点から、デリダとナンシーの思考の比較を試みた。フランソワ＝ダヴィッド・セバーらの先行研究が示しているように、『哲学における最近の黙示録的語調について』（1983年）や『ユリシーズ グラモフォン』（1987年）など1980年代のデリダの著作においては、声が痕跡として捉えられており、声のトーンによって意味に差異が生じるとされている。つまりこの時期のデリダが語っているのは、声のトーンが主体のコントロール下にはないという事態、いわば声が「主体化」することで、自己に現前する主体に亀裂が入るような事態なのである。声のトーンによって明らかになるこうした主体の内なる他性という問題系は、ナンシーの『声の分有』（1982年）にも共通している。同書で問われる言葉の差し向けの特異性とは、声の発声にともなうトーンの共約しえない特異性にほかならない。しかし、ナンシーは声の特異性を「分有」という概念を介して共同体の問題系へと結びつける点でデリダとは異なる方向へと進んで行く。ナンシーにとって、一義的に意味づけられない特異な声を分かち合うことこそ「声の分有」としての共同体であり、『デリダ 補遺（代補）』においてデリダの独特な声のトーンを回想しつつ思考を展開するナンシーは、声の特異なトーンを分有する共同体を実践しているのである。たしかに、晩年のデリダも「来るべき民主主義」という名においてトーンの分有と同一の事象を語っているが、それを「共同体」という名で語ることはけっしてなかった。ここに見られるのは、「共同体」という一つの名に二人の思想家が聴き取るトーンの違いであり、ひいては両者の耳の違いなのである。

柿並の発表は、友愛と政治の關係に焦点を絞ったものであった。友愛は一方で私的なものとして、公共的空間からは締め出されているように見える。しかし他方では政治を基礎づける徳として、根本的な役割を果たしているようにみえる。友愛は政治とどのような關係を取り結んでいるのか？

柿並はこうした観点からデリダの『友愛のポリティクス』を中心的な分析対象として取り上げた。その際このテキストが、80年代のナンシーがラクー＝ラバルトと主宰した「政治的なものに関する哲学的研究センター」（1980-83年）で推し進められた「政治的なものの退引」をめぐる議論への応答であったという当初の文脈に戻りつつ、彼らにとってカール・シュミットの思想が持ち得た意義を、その導入過程の仮説的再構成の形で提示した。それを踏まえ、「絶対的な敵」というシュミット的モチーフが、友愛に基づく営みであり、さらには友愛そのものとされる哲学にとってクリティカルな問いを突きつけてくることを確認し、不定冠詞単数形を伴う「友愛のポリティクス」（une politique de l'amitié）ないし「来るべき民主主義」（une démocratie à venir）といったデリダ後期の主題がいかかにしてシュミットへの抵抗となっているのかを跡づけた。全体討論においてはナンシーによる「兄弟愛」（fraternité）概念の援用をめぐるデリダの厳しい批判が当然注目されたが、柿並の上記の読解が示唆するところによれば「友愛」および「友愛のポリティクス」にも肯定ないし希求されるべきそれと、批判の対象となりうるものがあるのであって（デリダ自身、「友愛の別名としての兄弟愛」に触れている）、その限りでは「兄弟愛」批判は「友愛」概念にも反響するはずであろう。

ワークショップ5

l'écriture inclusive 再論

コーディネーター・パネリスト：立花史（フランス語圏文学）

パネリスト：矢頭典枝（カナダの言語政策）、Olivier Ammour-Mayeur（現代フランス文学・ジェンダー研究）、片山幹生（中世文学）

立花史の発表は、趣旨説明であると同時に、本ワークショップ全体の流れを要約する総論のような位置づけで、各論を他のパネリストに任せる形となった。

ただし、*écriture inclusive*（以下「包括書法」と和訳）の語義をその成立経緯とともに少し詳しく説明している。例えば、包括書法＝分かち表記（ex. étudiant·e·s）という初歩的な無理解もしくは単純化がいまだに見られるが、分かち表記は、三箇条から成る包括書法の第二条が含んでいる全三項のうちの一項目にすぎない（むしろ第一条には職業・肩書の女性形化が掲げられている）。また、包括書法

がフランスのメディアで注目を浴びたのは2017年だが、これは一部の教科書がこの書法を取り入れた年にすぎない。書法自体が発表されたのは2016年で、この書法は「包括書法」の名称も含めて広告代理店 Mots-Clés 社が打ち出したもので、同社が参照したのは、首相の独立諮問機関である男女平等高等評議会 (HCE) が2015年以降に発信してきた『性ステレオタイプなき公共コミュニケーションコミュニケーションのための実践ガイド』であって、この両者には作成意図や選択肢の幅にかなりの相違がある。

包括書法の三箇条が問題視するのはフランス語に見られる男性形優位の傾向だが、とくに争点となるのが第二条の扱う総称的男性形 (*le masculin générique*) である。男性形のとりわけ複数形は、男性 (形) と女性 (形) の両方をまとめて総称的に機能する (がゆえに、女性 (形) が不可視化される)。女性形を取り入れつつ、この総称機能にチャレンジするという意味で、包括書法は「言語のパリテ」の異名を持つ。この書法を批判する学者の一部は、ラテン語から継承した男性形の総称機能ゆえにフランス語の男性形が有する曖昧さを、「男性形」という名称そのものの改訂によって対処する方策も検討してはいるが、基礎をなす性と男性形とが特権的かつながりを有するフランス語の現状に対する根本的解決になるかどうかは疑問だ。ともあれ、包括書法の側も、第二条の全三項で、かなり原理的な代案を提唱しているため、実用性や教育上の負荷の点から批判を受けやすいのは事実だろう。

ケベックの包括書法におおよそ該当する *redaction épiciène* は、総称的男性形にチャレンジする点でフランスの包括書法との類似点が見られる一方で、そのアプローチが原理的ではなく柔軟かつ豊富で、近年の議論を受けてノンバイナリーな人々にも対応できる余地が広い点は注目に値する。フランスとケベックの作法の違いには、独立諮問機関の簡潔な提案と国策として発信された詳細なガイドブックとの相違、英語圏との距離など、いろいろと考察の余地があつて興味深い。

*

片山幹生の発表では、エリアース・ヴィエノほか包括書法の提唱者が言及する「近接語への一致」*règle de proximité* について歴史文法の観点から検証した。「近接語への一致」のルールとは、複数の名詞にかかる形容詞は、男性複数形にするのではなく、より近くにある名詞に性数を一致させるというルールである。ラテン語や古い時代のフランス語では「近接語への一致」が一般的に行われており、男性複数形での一致のルールは男性優位の考えを持つヴォージュラなど17世紀の文法家たちによって導入され、定着したものであるとヴィエノほかは主張している。

確かにラテン語や古仏語、中仏語などでは、形容詞を近接する名詞の性に一致させる例は多く見られるが、男性複数形になっている例も少なくない。とりわけ

形容詞が属詞である場合は男性複数形に一致する例が優勢となっている。

ヴォージュラは『フランス語についての覚書』(1647)のなかで「文法性の男性は〔女性より〕高貴なので、男性形と女性形が並ぶとき、男性形を優先しなくてはならない」と記しているが、当時の宮廷社会では形容詞は近接する語の性に一致することが慣用となっていることも記しており、必ずしも男性複数形への一致をルールとして提示しているとは言えない。形容詞の一致についてのヴォージュラの最終的な見解は、付加形容詞については近接する名詞の性に一致、属詞形容詞については男性複数形にするという、ラテン語や古仏語・中仏語の傾向を追認するものだった。

男性複数形への一致のルールは、ヴィエノらが主張するように 17-18 世紀の文法家に帰するものではなく、むしろ 19 世紀以降に広まり、定着したものと考えられるべきだろう。また 19 世紀以降、「近接性の一致」のルールが完全に忘れられてしまったわけではない。現代フランス語でも女性名詞のすぐそばに男性複数形の付加形容詞が置かれるのは好ましくないとされる。またグレヴィス＝ゴースの『ル・ボン・ユザージュ』(16 版、2016 年)には、近接する女性名詞に形容詞を一致させている 20 世紀の作家のテキストが引用されている。

性の異なる複数名詞への形容詞は男性複数形にするという慣用がルール化されているが、このルールは歴史的にみると比較的最近になって定着したものであり、ラテン語や古い時代のフランス語のように柔軟に、形容詞の一致について対応することは今後もそれほど大きな困難はないだろう。

*

Olivier Ammour-Mayeur の発表では、包括書法に触れつつ、職業・肩書の女性形化に関する 2019 年のアカデミー・フランセーズによる報告書を主に検証した。

アカデミーは、2019 年になってようやく職業・職能・職階・肩書の名称の女性形化を受け入れて、名称の女性形化に「原理的な支障はない」と認めた。報告書には「フランス語の傾向として、社会的序列の最上部にある職業(と職能)名は女性形にならないか、なってもごくわずか」とあるが、この表現は不適切で、そうした傾向を持つのは「フランス語」ではなく、その使用者たちの方だという点は強調の必要がある。次に、女性形の実践に関して、アカデミーの報告書によれば、「職業〔métier〕とは違って(とりわけ公的に委任された)職能〔fonction〕はその資格者とは異なり、その資格者の性別とは関係がない——職能は非個人的〔impersonnel〕なのだ、というのもそれが指し示すのは、個々の身元ではなく、一時的で喪失可能な社会的役割なのだから [...]」。「人が職能なのではない、人は職能に就くのだ」。実際には、この注釈が皮肉にも示唆しているように、métier と fonction の使用上の区別は、それらに従事する人物集団の区別の問題であるより、社会的かつ象徴的な格差の問題である。というのも「人が職能なのではない、人は職能に就くのだ」という表現がおわせているのは、métier に従事する人が

métier であって、métier を文字通り具現化しているのだということだからだ。

包括書法の争点の一つは、両性の本質化に制限を加えうる中性的なものを創造することであって、これはとりわけ、過剰もしくは不当に性的なマーケティングがなされたフランス語の使用のなかで認知されていない人たちの声の高まりに対する措置と言える (iel や ceux の提言もその一種)。包括書法の実践は多様で、目下、使用を通じて評価が吟味されている。ただし、過去の文学作品をこの書法で書き換えようとするものではなく、未来の文学作品をこの書法で書くことが推奨されているわけでもない。包括書法はとりわけ行政文書で使用されるべきもので、現にフランスの行政文書の部署では、包括書法の取り組みがすでになされ、実践の拡張に反対する理由は何もない。例えば、身元記入書類では、M、M^{me}、Français(e)、né(e)le...といった書法を、ここ数十年來、目にすることができよう。

*

矢頭典枝の発表によると、2019年3月、アカデミー・フランセーズが職業名詞・肩書の女性形化を容認すると発表したのに対し、カナダ・ケベック州では1976年に女性大臣の名称を la Ministre とする動きを発端として早くも1979年にはケベック州政府が正式に職業名詞の女性形化を推進する旨を発表していた。そして1981年、ケベック州政府の官報では「職業名詞・肩書の女性形化」のみならず「文体における男女平等の実現」をフランス語の書法として打ち出した。これが、ケベック州政府の言語機関であるケベック・フランス語局（以下 OQLF と略記）が1991年に発行したフランス語の包括書法についてのガイド *Au féminin : Guide de féminisation des titres de fonction et des textes* の基盤となった。これを2006年に更新したガイド *Avoir bon genre à l'écrit : Guide de rédaction épïcène* のなかでは、「人の呼称（職業名詞・肩書など）の女性形化」よりも「文書作成全般における男女平等の表れ」に重点が置かれ、これを「通性的な書き方（*rédaction épïcène*）」と呼んだ。2000年代中頃にはすでにある程度、人の呼称の女性形は定着していたと報告されていたが、2021年5月、報告者が女性の大学教員と弁護士の肩書を調査したところ、調査対象となったすべての肩書の女性形化が確認された。

ケベックが現在も普及に努めている「通性的な書き方」とは「文書における女性の存在の可視化 (*la visibilité aux femmes*)」と「文書の読みやすさとわかりやすさ (*la lisibilité et l'intelligibilité des textes*)」とのバランスを取った書き方である。これを可能にするには、通性的な書き方の一般原則の一つである「考え得るすべての方法を駆使する」のが重要だと OQLF は主張し、主に以下の工夫を提唱する。

(1) 人の呼称を le directeur et la directrice のように男女両形のセット (doublet) で書く。les étudiant-e-s のような分かち表記を避ける。

(2) doublet で文が冗長になる場合、集合名詞、役職もしくは所管を表す名詞か総称名詞を使う。例えば、**employés et employées** の代わりに **personnel** を使う。

(3) 通性的な代名詞を使う。例えば、il や ils の代わりに **vous, duquel** の代わりに **de qui** を使う。

(4) 文の構造を変えて、男女別の人の呼称を表さないようにする。

2018年7月のケベック州政府の官報では、求人広告や年次報告書などの行政的な性質を持つ文書での「通性的な書き方」の使用を勧告するとともに、文書における完璧な男女平等を目指す必要はない、という柔軟な姿勢が打ち出されている。

最後に、ケベックのフランス語の包括書法の普及は OQLF のウェブサイトによって円滑に行われている点、ケベックにはアカデミー・フランセーズのような政府とは独立した保守的な組織が存在せず、新しいものを受け入れ、そこからまた新しいものを作り出す土壌があることが指摘された。さらに、ケベックの包括書法にみられる男性と女性の存在の絶妙なバランスの追求は、カナダの国家レベルの公用語政策にみられる英語とフランス語のバランスのとり方と共通点があることも指摘された。なお、本報告は、2017(矢頭)「ジェンダーの視点からみるケベック・フランス語の言語政策—「通性的な書き方」の定着を目指して—」(『ふらんぼー』42号、東京外国語大学フランス語研究室)の内容に最新のケベック州内の動向を加えたものである。

*

質疑では、OQLFの「通性的な書き方」でも、新しい表記や代名詞を固辞する点でノンバイナリーのコミュニティとの間に対立点が存することが少し議論になったほか、アカデミーが2019年に職業・肩書の女性形化を認めるに至ったことを踏まえ、功労者探しの議論が盛り上がった。ただし注意すべきは、アカデミーのみならず政府や保守と中道の言語学者が、名指しのような日常言語では女性形を許容しつつも、法の言語で職能を記述する際は男性単数形を使用するという立場を堅持し続けている点で、ことほど左様に「総称的男性形」の問題系は根深い。

コーディネーターの個人的な展望では、フランスで論争中の包括書法がたとえ後退戦になるとしても、遅かれ早かれケベック式に近いものがフランス社会に導入され、教育にも徐々に浸透してゆくものと思われる。その際には、日本のフランス語教育でも、そうした書法や語法を取り入れてゆくことになるだろう。

II 書評

森本淳生、ジル・フィリップ（編）『マルグリット・デュラス 〈声〉の幻前——小説・映画・戯曲』、水声社、2020年

評者：後藤はるか（駒澤大学）

本書は、2018年に京都で開催されたデュラスの作品をめぐる日仏国際シンポジウムの成果として刊行された。収められた7つの論考を辿ると、それぞれの思考の穏やかな交流が伝わってきた。

ところで、表題の「〈声〉の幻前」という言葉遊びには戸惑った。声は、聞こえても目の前で形をなすことはない。声の幻とは美しいがそれは表現可能なかと考えこんだ。しかし、ジョエル・パジェス＝パンドン氏がそれを *voix-fantôme* と書くのをみて、小説『ロル・V・シュタインの歓喜』における *mot-absence* と *mot-trou* という不在の穴となった言葉の場所を思い出し、そこにジル・フィリップ氏が複数形で *voix fantômes* と書くのをみつけると、無数の声は何も言わずに虚ろな場所をただ響かせているイメージが思い浮かんだ。じつと場所をみつめていればよいのだった。声のイメージは、どこか他処からやって来る。

第一部のはじめで森本淳生氏は、デュラスが恋人と脚本を担当した1961年のアンリ・コルピ監督の映画『かくも長き不在』を扱い、記憶喪失の浮浪者の歌声が、かれと、戻らない夫を待ち続けるカフェの女主人、この二人の内面の虚空を貫通したことで、無縁なはずのかれらを引きあわせたのだと分析する。これは、58年の小説『モデラート・カンタービレ』以降、虚ろな場所に声が訪れることで生成してゆく抽象的な作品づくりがはじまった作家の転換期の特徴をよく捉えている。ところで声は、物語をそっと現実に結びつけるのだろう。ある出来事を伝える新聞記事から着想をえたこの物語のヒロインの境遇は、第二次世界大戦中に夫を待ち続けた作家のそれとも重なる。次に立木康介氏が扱うのも、実際の殺人事件を扱う新聞記事から着想をえた物語であり、そこには第二次世界大戦が密かに影を落としている。立木氏がその作品『イギリスの愛人（ヴィオルヌの犯罪）』の小説と戯曲を分析する手がかりとしたジャック・ラカンの「対象a」は、同居する聾啞者の従妹マリー＝テレーズ・ブスケを殺害したクレールが、肉体的には欲望されることがあっても、「その人らしさ」をなす声＝対象aは（話ができるのに）奪われており、つまり彼女がその人間性を無視されて暮らしてい

たという事実を浮き彫りにする。耳栓をして従妹の真似をし、何も聞こえてこないようラジオを捨てるなど傍目には奇行とみえる行いをくり返すクレールは、やがて従妹を殺すがその理由はわからない。いずれにしても、結果的に、彼女は人から（読者から）欲望される声を獲得する。そして彼女は、砂漠のような内的な場所に主観と客観が区別なく広がる「知性」のことを、はじめて人に向けて語るのだ。

第二部では、関末玲氏が、デュラスの映画における声の表現の変遷を丹念に辿り、さらに、記憶を守りたいが忘却してゆくその不安によって声が帯びる現実性が、幻としての声のイメージを映画をみるものに想像させるという逆説的なプロセスを分析している。これにより、作品の現実性を、出来事ではなく声の性質が担うようになったのがわかるだろう。次に橋本知子氏が、ストローブとユイレ、そしてジャン＝ダニエル・ポレと足立正生の映画作品における移動撮影をデュラスの77年の映画『トラック』のそれに比較しており、たえず消えゆく声が喚起する、目にはみえないべつの時間に属すイメージが、スクリーンに映るイメージに重なりゆくという映画的な仕掛けを再認させてくれる。映画における声の演出は、こうして複数の時が訪れる場所の表現を可能にした。それは、第三部のはじめに澤田直氏が分析する、76年の映画『人のいないカルカットにおけるヴェネチア時代の彼女の名前』の題名が含む *désert* という語の示す場所と同じである。澤田氏は、ラシーヌが『ベレニス』でアンティオキウスに叫ばせた狂わしい台詞からこの語の意味をつきとめている。そこに彼女がいたかもしれなかった、そこに愛があったかもしれなかった、そう条件法で語りうるのがデュラス的な不在の場所なのだ。

条件法は、語気を弱める。ジル・フィリップ氏が述べるように、デュラスは感情というものに魅惑されると同時にそれを嫌悪し、その表出と不在を同時に表現できる媒体を探した。こうして映画づくりから見出された声の表現はいかにして本に持ちこまれたのか、それを論じるのはパジェス＝パンドン氏だ。彼女によれば、書く対象すべてが作家の内側の失われた部分から届く声となり、『80年夏』以来のパートナー、ヤンとの「声の分有」によってこそ、デュラスは新たな本を書きえた。ここにきて抽象度は弥増す。しかし、ジル・フィリップ氏が強調する、声は作家が作品ごとに探求、選択した形式によってこそ表現されたということをおぼえてはなるまい。

それにしても、デュラスが戻ってきた本という場所が、まるで彼女が書くためにそこにいたかもしれなかった場所として、彼女の声の幻のような訪れをじっと待っていたかに思えてくる。本書を読み、デュラスの場所をまたみつめたくなった。

評者：山田広昭（東京大学）

意識の極北を目指した知性の詩人、地中海的明晰の体現者、こうした言葉がヴァレリーを形容する常套句の地位を失ってからすでに久しい。知性、意識、明晰さといった常套句の起源には、もちろん「テスト氏との一夜」、「レオナルド・ダ・ヴィンチの方法序説」、「覚書と余談」といった輝けるテキスト群（その輝きは今も色褪せてはいない）が読者に否応なく与える印象があった。しかし、ヴァレリー自身がそうしたイメージを自らの身にまとわせることには腐心したかもまた、今ではよく知られている。1892年の知的クーデタとして人口に膾炙した「ジェノヴァの夜」の神話化を行ったのは彼自身であり、公的にはほぼ20年にわたる「沈黙」に文学への決別としての意味を与えたのもまた彼の自己語りである。

たしかに、こうした自己神話化の背後に、つまりは彼が標榜する知性の偶像化の裏面に、荒れ狂う情動があることをヴァレリーは少しも隠さなかったし、意識に至上の価値を付与しようとする傾向が、自らを引きずり回す感受性や情念に対するほとんど絶望的な統御の試みであることもまた秘密ではなかった。しかし、それが具体的にどのような経験に基づいているかを知ることになれば話は別である。ヴァレリーの生前は言うに及ばず、その死後も遺族に対する配慮から彼と愛人たちとの関係について突っ込んだ言及を避けることが研究者の習わしであった時代があり、またそうした言及を許すだけの十分な資料も長らく隠されたままだった。その潮目がはっきりと変わったのは今世紀になってからである。ヴァレリーが愛人たちと交わした書簡集が次々と出版され、彼の女性関係の実相に迫ろうとする研究もすでに数多く蓄積されている（そこには、知性偏重のヴァレリー像を刷新することを目指した清水徹や松田浩則をはじめとする日本人研究者の先駆的な仕事が含まれる）。

本書もまた、まちがいがなくそうした流れの中にある。しかし、本書が単なる伝記的研究と一線を画するのは、ヴァレリーにおける恋愛を何よりもまずエクリチュールの問題として、しかもヴァレリー的エクリチュールの根幹にかかわる問題として位置づけていることにある。本書が「愛のディスクール」と題され、かつ「ヴァレリー「恋愛書簡」の詩学」と副題されているのは、そのためにほかならない。

本書は、2019年に京都大学人文科学研究所で開催されたシンポジウムでの発表をもとにしているが、ただの論集ではなく、ヴァレリー研究者でない読者に対

する十分な配慮が為されている。読者は編者の手になる最初の二つの章、すなわち「序」と「ヴァレリーと女性たち」を読むことで、この詩人の「恋愛書簡」を読むことに何が賭けられているかを、そして彼がその生涯のさまざまな時期に四人の女性と結んだ、それぞれに独特な関係についての確かな見取り図を得て先に進んでゆくことができる。

その後が続くのは、編者を含む個性溢れる五人の著者による、オリジナルで確かな研究成果にもとづいて展開される魅力的な論考であるが、それらを読み終えたときに感じられるのは、ヴァレリーと妻との関係がほとんど一度も研究者の関心を引いたことがないという事実を別にすれば、カトリーヌ・ポッジという女性の圧倒的な存在感ではないだろうか。四人の女性のうち、最初のひとり（シルヴィ・ド・ロヴィラ）は、まだ十代だったヴァレリーの純然たる片思いの対象でしかなく、三人目にあたる彫刻家（ルネ・ヴォチエ）もまたヴァレリーの求愛に最終的に応えなかったことを思えば、ポッジが際立つのは当然だともいえるが、この高名な外科医（『失われた時を求めて』のコタール医師のモデルとされるサミュエル・ポッジ）の娘は、ヴァレリーと真剣に、文字通りに命を削るようにして渡り合おうとしたおそらく唯一の女性として、自らの愛人の存在とエクリチュールの本質をすどく見抜いていた。彼女が日記の中でヴァレリーに差し向けた次のような言葉はそのことを余すところなく明かしている。

「あなたが私を愛しているのは、あなたが私のなかにあなた自身を見ているからです。いえ、むしろこう言わなければならないでしょう。あなたは私を愛しているのではなく、あなた自身を愛しているのです。ナルシス[であるあなたは]、たえまなくあなたを映しつづけるこの精神的な泉[である私]のなかに。」（本書、188頁）

だが、ナルシスであったのは、独りヴァレリーだけではなかった。カトリーヌもまたもう一人のナルシスだったのであり、彼女がヴァレリーを愛したのは、この詩人のなかに自らの分身を見いだしたと信じたからにほかならない。ふたりのナルシスが組み合わせれば、その争闘が幸福な結末を見ることがないことは自明である。

しかし、本書の興味の中心をヴァレリーと女性たちが生きたドラマの実相に求めることはまちがいだろう。すでに述べたように、問題となるのは、ヴァレリーのテキストとしての「恋愛書簡」であり、それらの書簡がヴァレリーの作品群とのあいだにもつ関係である。森本の言葉を借りれば、それは「単なるエロス体験の記録ではなく、ヴァレリーの存在とエクリチュールの深部にかかわる問題と共振するテキスト」なのである。私たちはそこに「知性にも意識にも還元できないものとの遭遇」という彼のライトモチーフを何度も見いだすことになるだろう。

評者：池田潤（白百合女子大学）

文学研究をめぐるある素朴な思いに、私は「サント＝ブーヴ・コンプレックス」という呼び名を付箋のようにしてつけている。それはブルーストが目の敵とした批評家の方法、伝記的事実や同時代的事件を詳細に調べるというアプローチを、まさしくブルースト研究に適用するということについての漠然とした感慨だ。まるで中学生が「どうして勉強しなくちゃいけないんですか」などと先生につかかっているような場面になりそうでなかなか人前で話題にはできないのだが、たとえばサント＝ブーヴのバルザック論についてのブルーストの言葉についてとらわれてしまう。「バルザックの三十女について話すかわりにバルザックのもの以外の三十女について話し […]、バルタザール・クラスに二言三言触れるや現実のクラス的人物のことを話す」（『サント＝ブーヴに反論する』）。ブルーストを研究するからといってブルースト主義者にならなければならないわけではないのに、私はいつまでも、研究活動のほとんど入り口近いところでまごついている。

ところが、本書が示すのはまさしくサント＝ブーヴ的な博覧のもつ力なのだ。2004年以降個別に発表されてきた著者の論文群がまとめられ、さらに書きおろしの一章（音楽篇のドビュッシェ論）が加わったこの巨大な成果は、『失われた時を求めて』で言及される作家、画家、音楽家について、ブルーストがどのような空気の中でそれらに触れたか、そしてその体験はいかなる変遷を経て小説表現となったかを明らかにしている。

内容についての詳細な紹介はすでにされているので（小黒昌文による書評、『Stella』、九州大学フランス語フランス文学研究会、39号、2020年）ここではごく一部だけをとりあげるならば、ルコント・ド・リールについて論じた章を挙げたい。章題にある通り『サント＝ブーヴに反論する』におけるもう一人の詩人だ。ブルーストのルコント・ド・リール論は「カイエ 64 に収められている」（本書 65 頁）のだが、「この草稿帳は収集家ジャック・ゲランが所有していた一三冊のカイエのうちの一冊であり、フランス国立図書館に收藏されるようになったのは一九八三年のことであった」（同上）がために、現在出版されている『サント＝ブーヴに反論する』では読むことができない。この章ではそのルコント・ド・リール論が成立過程の解説とともに読み解かれ、さらにはポール・ブールジェ、ジュール・ルメートル、フェルディナン・ブリュンチエールといった批評家たちの言説のうちに位置づけられる。加えてやはり、ブルーストが直接の批判の

対象としたサント＝ブーヴのルコント・ド・リール評、そのうちとくに『月曜閑談』第5巻所収の「*De la poésie et des poètes en 1852*」が、現在でもフランス近代詩批評のひとつの基準点として参照され続けているからには（たとえば Jean-Pierre Bertrand et Pascal Durand, *Les poètes de la modernité : de Baudelaire à Apollinaire*, Seuil, 2006）、二重に未刊行となったプルーストの批評を『ジャン・サントウイユ』から『失われた時を求めて』に至る小説表現と関連づけた本章の意義はとりわけ大きい。

もうひとつ、本書全体を通して目玉となっているのは絵画編のモネ論であろう。プルーストの睡蓮描写が数あるモネの睡蓮画のどれを念頭に置いたものなのかについて、吉川一義『プルースト美術館——「失われた時を求めて」の画家たち』（筑摩書房、1998年）所収の「コンプレーの睡蓮とモネ」を再検討しつつ、その前提となる草稿帳の執筆年代推定にも議論の射程が及んでいる。

評者にとっては、本書冒頭を飾る草稿帳にみられる固有名詞についての統計的分析が、つねに参照する著者の一連の研究のなかでもっとも個人的な思い入れのあるものである。修士論文のテーマに悩んでいたころ、はじめて参加した国際シンポジウムでこの研究成果に接した時の感動は忘れられない（評者にとってだけでなく、既刊の『マルセル・プルースト草稿帳総合索引』はあらゆるプルースト研究者にとってすでに必携の書だ）。どの固有名詞がどれだけの頻度で草稿帳にあらわれ、また決定稿とどのような差異があるかを一望できる統計表は、プルースト研究のつきせぬインスピレーションの源であり続けるだろう。

固有名詞は、小説というフィクション空間にあって明示的に現実とつながる要素である。同時にまた逆に、小説は我々の現実のなかにある。しかし現実がどのようなものなのか、誰に確かなことが言えるだろう。「[スワンは]フェルメールの作であるという確信を持つほどに、画家に対する深い理解と鋭い眼識を備えた専門家に仕立てられているのである。もっとも現在ではこの作品がフェルメールの真作であることに疑問を呈する研究者もおり、もしそうならスワンの眼識もあやしいものになってしまう」（本書130頁）。

本書が圧倒的な力量をもってする現実の徹底的な調査は、読みの地平の探索なのだ。それに加えて、個々の芸術作品は作者の体験やイメージを介することで作品の中で乱反射し、またそのそれぞれの屈折率が精密な分析を要する。広汎かつ厳密な草稿調査によって『失われた時を求めて』の識闕下を照らす本書が、他方またサント＝ブーヴ的な手法によって開示するのは、もっとも即物的な現実がもっとも個人的な夢の基質となるというすぐれてプルースト的なヴィジョンなのである。

「échos（会員投稿欄）ご投稿のお願い」

会員の皆様から広く投稿を募っております。

- ◇ 内容について 「フランス語、フランス文学、フランス語圏、ないしは本学会にかかわるものについてのエッセーを広く募集する。例えば、自分とフランス語圏文学とのかかわり、学会とのかかわり、内外の講演会やシンポジウムの体験記、支部会イベントの報告など。」
- ◇ 分量 cahier 2 頁分を上限とする。
- ◇ 掲載の可否について 研究情報委員会での審議を経て掲載の可否を決定する。掲載の可否については個別に対応していくことになるが、最低限の基準として以下の項目を設ける。
 - ・ 特定の個人や団体への誹謗・中傷のあるものは掲載しない。
 - ・ 「フランス語、フランス文学、フランス語圏、ないしは本学会にかかわるものについてのエッセー」であること。
- ◇ 締め切り 毎年3月・9月末日
- ◇ 宛先 日本フランス語フランス文学会研究情報委員会までメールでお送りください：
cahier_sjllf@yahoo.co.jp

書評対象本推薦のお願い

日本フランス語フランス文学会では学会広報誌 *cahier* および学会ウェブサイトにて公開する書評作成にあたり、広く対象となる本を募集しています。つきましては、下記の要領により、書評対象として相応しいと思われる本をご推薦いただければ幸いです。なお、ご推薦いただいた本は研究情報委員会で集計し、書評する本を決定させていただきますので、必ずしもご推薦いただいた本の全てが書評されるわけではありません。

- ◇ 目的 日本におけるフランス語、フランス文学研究の成果を収集し、権威付けされた書評ではなく、内容紹介的な書評により公開する。
- ◇ 書評の対象 原則として、過去1年間に刊行され、その内容から広く紹介するに相応しい学会員による著書を対象とする。翻訳なども含み、日本で刊行された著書には限らない。フランス文化、映画などに関する著書も排除はしない。
- ◇ 推薦要領 学会員による他薦を原則とします。著者名・書名・出版社名・発行年月を明記の上、紹介文(200字程度)を付してください。著作のみの送付については対応しかねますので、ご遠慮ください。
- ◇ 締め切り 毎年3月・9月末日
- ◇ 宛先 日本フランス語フランス文学会研究情報委員会までメールでお送りください：
cahier_sjllf@yahoo.co.jp

また、学会ウェブサイト *cahier* 電子版の「書評コーナー」に掲載する書評も以下の要領で募集しております。

- ◇ 目的および 書評の対象 上記の書評対象本と同じ。
- ◇ 執筆要領および締め切り、原稿送付先 学会員による他薦の書評あるいは自薦の自著紹介で、著書名・書名・出版社名・発行年等を除いて800字以内の原稿を随時受け付けておりますので、上記の宛先にお送りください。

なお、これらの書評のうち *cahier* にも掲載するに相応しいと委員会で判断したものについては、他薦の場合は *cahier* 用に2000字程度に手直しをお願いすることがあります。また、自薦の場合は委員会で執筆者を選定して依頼します。

cahier 28

編集 研究情報委員会

発行日：2021年9月30日

日本フランス語フランス文学会

150-0013 東京都渋谷区恵比寿3-9-25 日仏会館505

TEL：03-3443-6671 FAX：03-3443-6672